

「被災地だからこそそたくましさ学んで」

漁船のレーンが動き始める。子供たちが船の横に垂れ下ろすの先に目をこらした。澄んだ海中から上がってきたのは、たぐさんのホタテ貝。表面はツギンチャクやフジツボに覆われ、お店に並ぶ姿とは大違い。開いた「面白ー」。

宮城県石巻市雄勝。ホタテ貝の養殖で知られるこの地の漁業者が今月2日、市内の小中学生を招き漁業体験会を開いた。船上から加工場に移り、刃物で貝殻を剥きとるべく、おなじみの二枚貝が現れる。夢中になって片付けていく様子を船村茂幸（いむらむね）たちが「恐ろしいくらいで見ていた」。

見て触れて生きる力に



小学生の漁業体験会を企画した岩村さん（2日、宮城県石巻市）

共助の現場

石巻市発

「イートリートライム」業者たちには初めての（東京）に所属。雄勝で常駐し、東京などから寄せられる支援の取りまとめを担う。

この日の体験会を漁業者と結び企画。漁勝太（27）は「復興を多量に力を入れた」。

新しいことをしなければ

る。被災地だからこそ、ベンチャー企業を意欲。だ。たくましく生きる力を伸が震災後は「何もしくばしたい。豊かな自然なていいのか」という疑問が地域の良きにも改めてが頭を離れなくなった。気づいてほしいと原料。希望の企業に内定した後らせた」と頼り頼り。卒業目前の2月。先輩の紹介でスイートトリイが学校との調整なら、岩村トを知り、「復興に向いて様々な活動が芽吹いている今こそ被災地に行かなくては」と感銘を受けた。

昨年、市立雄勝中学校で実施した学習支援はこの夏、市内の他の3つの小学校にも広げ、サマースクールや夏期講習会を開催した。

学校のニーズの聞き取り、ボランティア組織や学習塾への講師派遣の依頼、開催を知らせるチラシの作成……「最良の学び」を目標に、裏方を一手に引き受ける。「教員も疲れており、本当に助かる」と雄勝中学校の早坂徳世（58）。

今春、北海道大を卒業。企業の内定を辞退し被災地支援の現場まで行く選択も「あり」に。社人経験はない。だ。

就職活動では「自分が成長できる」と考え、写真 伊藤航